

不登校・ひきこもりへの早期支援推進のお願い

拝啓 初秋の候、貴機関におかれましては日頃より地域子ども・若者支援にご尽力いただき、厚く御礼申し上げます。

さて、当法人では今年度、独立行政法人福祉医療機構（WAM）の助成を受け、「不登校・ひきこもりの初期支援事業」に取り組んでおります。

全国的にも不登校やひきこもりの問題は年々増加傾向にあり、宮崎市内においても早期に対応できず長期化するケースが少なくありません。背景には「相談しても具体的な支援につながらない」「医療や専門機関を本人や家族が拒否している」といった課題が存在し、家族の孤立感や不安を深めています。

そこで本事業では、初期の段階から家庭に寄り添い、安心できる日常を取り戻すことを目的に、訪問支援や伴走型のサポートを実施しております。

しかしながら、地域に根ざした相談支援機関の皆さまのお力添えなくしては、当事者・家族に適切な支援を届けることはできません。

つきましては、貴機関におかれましても、当事業の趣旨をご理解いただき、相談窓口で関わるご家庭の中で医療・福祉につながることをためらっている方々へ、本事業の訪問支援をご紹介いただければ幸いです。

また必要に応じて連携を図り、支援の初期段階から情報を共有しながら共に伴走していければと願っております。

子どもや若者が安心して一歩を踏み出せるよう、どうかご協力のほどお願い申し上げます。

今回の WAM 助成事業のプロジェクトの目的は、早期発見・早期支援・早期回復を願い、助成事業としてプランを立てました。

<お問合せ先>

NPO 法人宮崎もやいの会

宮崎市丸島町 4-3 第 6 シャトーモリオカ 203 号

TEL：0985-71-0036 090-9212-3475（助成事業用携帯）

<http://www.m-moyai.com/index.html>

Email：m-moyai@kag.bbiq.jp

今回の助成事業の不登校に関する現状と WAM 助成事業支援内容。

1. 現状と課題

- ・ 宮崎県内のひきこもり者数：約 10,000 人（宮崎市：約 3,500 人）
- ・ 多くの家庭が「相談はしたが、具体的な支援につながらない」状態
- ・ 支援が遅れると、孤立や学びからの断絶が長期化して家族が疲弊
- ・ 学校現場だけで抱えきれないケースが増加中

2. 早期支援の必要性

- ・ 初期段階で訪問型の伴走支援を行うと、復学や社会参加の可能性が高まる
- ・ 不登校やひきこもりの初期の支援によって長期化を避ける
- ・ 長期化によって二次障害としての精神疾患の罹患を食い止める
- ・ 保護者の不安や孤立感が軽減され、家庭関係の悪化を防止する
- ・ 家族の長期にわたる経済的・精神的な負担による疲弊を軽減する
- ・ 学校復帰だけでなく、在宅学習・地域活動など多様な選択肢へ橋渡し可能

3. WAM 助成事業の特徴

- ・ 福祉医療機構（WAM）の助成により、今年度より訪問看護師に有償での支援事業開始する
- ・ 訪問支援を軸に、学校・家庭・地域をつなぐ「初期介入モデル」を構築
- ・ 制度の空白になりやすい初期段階に焦点を当て、切れ目のない支援を実現
- ・ 訪問看護ステーションの看護師の特徴やスキルを活かして訪問型の伴走支援を継続的に実施して、傾聴を基本に家族や子供に対しての生活支援や地域の支援機関の情報提供、緊急の場合に医療支援ができることも訪問看護師の持っているスキルで、医療支援のみでなく家族に包括的な支援を提供できることが最大の特徴です。

4. 訪問支援を推進する訪問看護ステーション

- ・ 訪問看護ステーション栞
- ・ 訪問看護ステーションハピネス
- ・ 訪問看護ステーションフローレット
- ・ 訪問看護ステーション心奏
- ・ 訪問看護ステーションかえるのほっぺ
- ・ 訪問看護ステーションおあひ
- ・ 結訪問看護ステーション
- ・ 訪問看護ステーションオリーブ
- ・ 訪問看護ステーション笑歩
- ・ 訪問看護ステーションベスト
- ・ こどもとおとなの訪問看護ろけっと★ステーション

家族支援の現場で伝えたい
～親の言動が子どもに与える影響と具体的な関わり方～

■ **なぜ親の関わり方が重要か！**

子どもが不登校やひきこもりになる背景には、自己否定感や社会的なつまずき、心の傷つきなど様々な要因があります。

その中で、親の何気ない言葉や態度が、回復を支えることもあれば、逆に子どもの心をさらに閉ざす要因にもなります。

家族支援では、「親のかかわり方の変化」が支援の出発点であり、回復の土台とされています。

■ **支援者が家族に伝えたい「具体的な言動アドバイス」**

状況	よくある親の言動（NG）	支援的な言動（OK）
子どもの無気力・停滞	「いつまでこのままているの?」「何か始めないと」	「あなたのペースで大丈夫」「今は休む時間なんだね」
状況を聞き出したいとき	「何が原因なの?」「どうして?」	「今こうして一緒にいられて嬉しい」「聞かせてくれてありがとう」
価値観の違いに戸惑うとき	「そんな考え方は間違ってる」「もっと前向きに」	「あなたはそう感じたんだね」「そう思うのも自然だよ」
親が不安を抱えているとき	（無言・ため息・態度で圧をかける）	「私も不安だけど、一緒に考えていこうと思ってるよ」

■ **支援の視点：親の姿勢を変える4つのステップ**

1. 評価・指導から共感・尊重へ
→ 「正す」より「理解する」ことが信頼関係の出発点。
2. 原因探しよりも今を受けとめる
→ 「なぜ?」ではなく「どう過ごしてる?」「何か伝えたいことある?」
3. 期待よりも安心感を伝える
→ 「こうなってほしい」ではなく「いてくれて嬉しい」という存在の承認
4. 変えようとせず、待ち、寄り添う
→ 子どものタイミングを信じ、先回りせず伴走する。

■ **支援者の役割とは**

- ・家族を責めず、親の気づきと変化を支援する。
- ・家族の焦りや不安に耳を傾ける。
- ・「親も支えられる側である」ことを家族に伝える。
- ・小さな変化（表情・言葉の変化）と一緒に喜び、継続を励ます

初期の段階での子供の状況での支援

1. 会ってくれない場合の支援

- **あきらめないで関わり続ける**
無理に会わせようとせず、手紙・メッセージ・親を通じた声かけなど「あなたを気にかけている」という気持ちを伝え続けることが大切です。
 - **安全感を育てる**
「強制されない」「批判されない」と感じられる状況をつくることで、安心感を持てるようになります。
 - **関心を共有する**
子どもの好きなこと（ゲーム・音楽・趣味など）を一緒に楽しんだり、話題にしたりすることで、無理なく距離を縮められます。
 - **親への伴走支援**
子ども本人に直接アプローチできない時期は、まず親への支援が重要です。親の不安を和らげ、接し方を工夫することで間接的に子どもへの環境を整えられます。
-

2. 会ってくれる場合の支援

- **傾聴と尊重を最優先に**
子どもの話したいことを受け止め、評価やアドバイスを急がず、気持ちや考えを尊重します。
 - **小さな信頼の積み重ね**
約束を守る・無理な期待をかけないなど、「安心して会える相手」という信頼を時間をかけて築いていくことが大切です。
 - **主体性を尊重する**
何を話すか、どのくらいの時間一緒に過ごすかを子どもに決めさせ、支援者が主導しすぎないこと。
 - **安心できる場づくり**
学校や社会復帰を急がせず、まずは「安心して過ごせる場所」として関わりを持つことが、次の一歩につながります。
-

まとめ

- 会えないときは、存在を伝え続ける・親を支える・安心を育むことが中心
- 会えるときは、傾聴・尊重・信頼関係づくり・主体性を大事にすることが中心

いずれの場合も、焦らず「その子のペース」を尊重することが、長期的な回復や社会とのつながりに大きく影響します。